

ペットライフ

mail:bunka1@ma.kitanippon.co.jp

獣医の

カルテ



20



チエルシーアニマル
クリニック
(富山市上飯野)

小池 博行

私たち人間社会では一般的になつた悪性腫瘍(Ⅱがん)。今や日本人の2人に1人はがんにかかり、3人に1人はがんで死亡するといわれています。動物社会でも同じように医療レベルが向上し、平均寿命が延びると同時にがんの発生率も増加しています。犬や猫の腫瘍は8歳から増加し始め、10歳では45%ががんにかかるそうです。年齢別でも多くなります。3匹に1匹はがんで死亡しており、死因の第1位を占めているといわれています。

肥満細胞腫というがんを(存じ)でしょうか? 実は肥満細胞腫は動物の皮膚にできる腫瘍の中で最

皮膚にできる肥満細胞腫



肥満細胞腫の外科手術前(左)



多です。肥満という名前ゆえ、太っている子にできるのでは? という印象がありますが、太っている、痩せている、とは関係のないがんなのです。

また皮膚のどこにでもできて、さまざま形態になるので「偉大な詐欺師」という別名があります。つまり見たり触ったりしただけではいぼや、良性腫瘍(Ⅰポリープ)と区別できないのです。例えば、写真のように乳腺の所にて

早期発見で外科手術

見た目だけで判断できないのががんの特徴になります。細胞診検査で肥満細胞腫と分かったら、この先の治療は外科手術が第1選択となります。ただし、この腫瘍は広がっていくタイプなの

きているから乳腺腫瘍というわけではないかもしれません。皮膚が赤く皮膚病のようだと思っていれば、肥満細胞腫だったということもありえます。では、いろいろな見た目があのにどうやって肥満細胞腫と分かるのでしょうか? まずしこりができたら、細い針を刺して細胞の形態を見る細胞診検査が重要になってきます。この腫瘍は細胞診検査で容易に診断ができるケースが非常に多いです。どの腫瘍にも共通するのですが、特に

で、通常よりもかなり大きく切除しないとダメです。また切除後に病理検査を行い、グレード(悪性のレベル)に応じて、抗がん剤、分子標的薬などを用いて治療することが必要な場合もあります。このがんに限らずですが、いかに早く腫瘍を発見し、しっかりとした診断と適切な治療を施すかが大切です。人も動物も高齢化社会になってきました。日々ペットと触れ合っていて異常を発見できるかもしれません。ぜひご自宅のペットの健康チェックをしてみてください。